

古代マケドニアにおける女神信仰

—考古学的視点からみたその様相と特徴—

松尾 登史子

The Archaeology and Characteristics of the Cult of the Goddesses in Ancient Macedonia

Toshiko MATSUO

古代マケドニアの信仰世界は、ギリシアの神々と英雄の神話を軸として地神と外来神が混淆・同化したものとされ、ゼウスやヘラクレスなど建国祖神への信仰に象徴される父権的イメージを伴ってきた。しかし近年の調査結果は、これを覆すかのように、生きとし生けるものを育む母なる女神が力をもつ姿を描き出している。神域・神殿、神像、小像の分析により、デメテルや母神、アフロディテなどの信仰が浮かび上がり、そこには母-娘ペア神を軸とした女神信仰の存在が認められる。その変遷を辿れば、ディオオンに始まりアイガイ（ヴェルギナ）を経て、ヘレニズム期首都ペラに集約され、ここに鎮護国家的役割と冥界性を期待される存在となったことが分かる。

キーワード：古代マケドニア、女神信仰、小像、母-娘ペア神、デメテル

Based on Greek mythology of Olympian pantheon and heroes the ancient region of Macedonia was described as a land of innumerable cults mixed with local and foreign deities. This religious life was accompanied by paternalistic images symbolized by the ancestral deities, Zeus and Heracles. In contrast, results from recent archaeological research show the existence of the Mother Goddess fostering those living and in power. Analysis of the sanctuaries, religious statues and figurines, testifies the cults of goddesses like Demeter, Mother of the Gods, and Aphrodite, as well as the existence of Mother and Daughter pair goddesses. The pair goddesses' cult changed its appearance during its spread from the old sacred city of Dion via classical Aigeai (Vergina), to Hellenistic Pella, where it seems that the Goddesses finally reached their prominent position with power to protect the city, the nation and chthonic life.

Key-words: Ancient Macedonia, cult of the Goddesses, terracotta figurines, Mother and Daughter pair goddesses, Demeter.

I. はじめに

古代の東地中海世界において、ギリシアの周縁地域に住む民が自らの起源をギリシアの神々と英雄の系譜に求めたのはよく見られた現象であった（cf. 庄子 2002）。古代マケドニアも例外でなく、王家は、アルゴス（Argos）を出自として、英雄ヘラクレスの血統を引くテメニダイ（Temenidai: Τιμενίδαι）あるいはアルゲアダイ（Argeadai: Αργεάδαι）を名乗った¹⁾。これは前7世紀半ばに歴史の舞台に登場したマケドニア人が、南ギリシアのポリス世界と関わる中で自らのアイデンティティを確立する為に創り上げた建国神話であるともいわれる²⁾。馬を操り勇武を尊ぶマケドニア人らに似つかわしい父祖ヘラクレス、そして更にその父であるオリュンポス最高神ゼウスへの信仰につい

て、稀少な文献史料の他、マケドニア人自身の残した古銭や陶器、家具調度品などの考古学的遺産にもその刻印がみられる³⁾。その一方、近年の考古学的調査により、文献史料からは見えてこなかった彼らの信仰世界の新たな姿が浮かび上がってきた。それは、質実剛健の気風にふさわしい、力の象徴としての男神・英雄崇拜の一方、生きとし生けるものを育む母神的要素に冥界性をも併せ持つ女神への信仰が大きな力を持ち、また重要な役割を担っていたという実態である。デメテル、母神、ペルセフォネ、アルテミス、アフロディテ、などの女神たちは、しばしば母-娘のペア神として機能していたとみられ、ヘレニズム期首都ペラ（Pella: Πέλλα）で都市中心部に大規模な神殿が奉じられていた母神とアフロディテは他の何れの神々をも凌ぐ圧

倒的な存在感を示す⁴⁾。

本稿では、近年明らかになったマケドニア諸都市の神域・神殿、神像や小像などを分析対象として、南ギリシア植民都市や土着の伝統との関わりの中で、古代マケドニア人による女神信仰がどのようなものであったか、その様相について考察し、特徴を見出すことを目的とする。

II. 主題の背景

古代マケドニア人は文献を殆ど残さず、古典文献からの情報は主に前5～4世紀のアテナイの著述家たちによるものに限定される⁵⁾。従って、彼らの信仰の様相を知る為の情報源は、当初はこれら稀少な古文獻の他、現地で出土した碑文や古銭が主であったが、当該地域、及び、カルキディケ (Chalkidike) 半島やトラキア沿岸地方などの周辺地域の考古学的調査の進展に従い、徐々に貴重な遺産が紐解かれ、研究の新たな視野が拓けてきた⁶⁾。

1. 研究・調査史

かつて古代マケドニア王国の栄えた地は現在バルカン半島南部4カ国に跨るが、ギリシア領マケドニアが主要な表舞台であり、激動の近現代を生き抜いた地でもあった⁷⁾ (図1)。古代マケドニアの調査・研究は、「外国遠征軍の踏査」の世紀であった19世紀にその礎があり、英仏の軍人や研究者により各地に分布する史跡に関する報告が書かれ、考古遺物が収集された (松尾 2008: 175-176)。これら

西欧人による活発な調査活動の一方、オスマン帝国支配下のギリシア人たちも限定的ではあるが調査活動を徐々に開始する。20世紀の初頭、マケドニアがオスマン帝国から解放される頃に W. バージェ (Baegel) が上梓した博士論文がマケドニアの信仰の様相をまとめた唯一の報告であり、これはマケドニア各地に残る聖域の古跡を調査したものであった⁸⁾。このほか、ギリシア人文学者 M. デミツァス (Demitsas) が碑文や地理について行なった報告、またドイツ人 H. ゲブラー (Gaebler) の古銭に関する集成などからも、古代マケドニアの信仰に関する情報が窺える⁹⁾。しかしその後、2つの大戦、それに続く内戦、と長い混乱と苦難の時期を経て、1950年代以降にギリシア人の手に依る総合的発掘調査がマケドニア各地で開始されるまで、古代マケドニアの信仰に関する調査報告が出されることはなかった。正確に言えば、20世紀後半、信仰に関連する特定の遺跡や遺構の発掘調査報告は随時発表されてはきたが、一つ一つの発掘報告書の積み重ねからテーマに従って集成した報告は、1990年代に集中して世に出ることになった。つまり、1990年以前は、R. ウィット (Witt) の古代マケドニアにおけるエジプト由来の神々の信仰について論じた報告 (Witt 1970) のみであったが、1990年代には、アスクレピオスやゼウス・ヒュプシストス (Zeus Hypsistos: Δίας Ὑψιστος)、ヘリオス (Helios: Ἡλιος) などの南ギリシア由来の神々についての考察が出される (Βουτυράς 1993; Χρυσοστόμου 1994; Τσιγαρίδα 1999)。女神

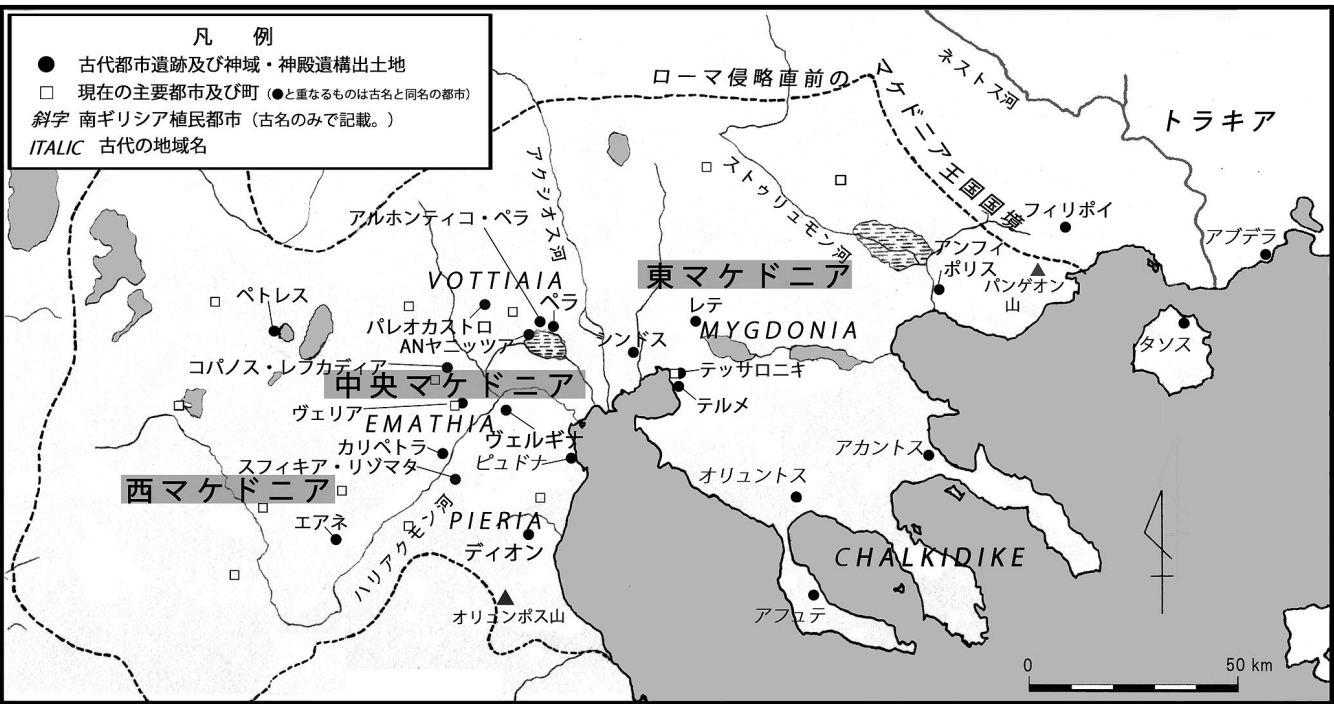


図1 古代マケドニアにおける都市遺跡及び神域・神殿遺構出土地 (本題関連)

信仰についてはシリア由来の女神アタルガティス (Atargatis: Αταργάτις) 信仰が存在していたことが報告され、また南ギリシア植民都市の建国神話との関連からアフロディテ神殿の痕跡について論じた考察もなされる (Χρυσόστομου 1992; Βουτυράς 1999)。そしてこの頃行われていたペラとディオン (Dion: Δίον) の都市遺跡の発掘調査により、古代マケドニアの信仰世界のイメージが一気に鮮明化することになる。前者では方格状都市計画が適用された都市中心部のアゴラの北に隣接する形で大規模な「母神とアフロディテ」神殿 (Sanctuary of the Mother of the Gods and Aphrodite) の遺構が出現、その都市域境界付近にはデメテル神殿址が出土、後者はオリュンポスの麓でゼウスとムーサをはじめとした様々な神々を奉ずる聖域を擁した聖都市であったが、その聖域の数ある神殿の中でひととき目を引く規模でデメテル神殿址が出土した。各神殿の発掘調査を担った M. リリンバキ-アカマティ (Lilimbake-Akamate) と S. ピンヤットルウ (Pingiatoglou) が調査報告を行ないつつ、各女神神殿の建築遺構や出土遺物を分析し、古代における信仰の様相を考察、古代マケドニアにおける生き生きとした女神信仰の在り様を鮮明に印象づけた (Αὐλιμπάκη-Ακαμάτη 1996a, 2000; Πινιάτογλου 2015)。これ以外に首都アイガイ (Aigeai: Αἰγαί) と比定されるヴェルギナの都市遺跡でも都市の中核付近にエフクリア (Efkleia: Εύκλεια) 神殿、そして母神神殿が出土しており (Δρούγου και Σαατσόγλου-Παλιαδέλη 2000)、これらの発掘報告とその研究結果は古代マケドニアにおける女神信仰の重要性を物語っている。

2. 古代マケドニアの神話とその体系

既述のように、古代マケドニア人の信仰世界について、かつて研究者は、古文書や各地に残る地名、碑文、そして古銭の研究により知見を得てきたが、考古学的調査の進展により様々な物証が得られるようになり、神話や伝承と歴史的事象との関連も考察されるようになってきた。古代ギリシアとその周辺世界における神話の形成は、文明の中核地域であるギリシアポリス世界が共有する神々との関連を軸に、在来の神々との混淆・同化、また分化がおり複雑な様相を呈するのが常であり、実際の人の移動や交流を何らかの形で反映したものであるといえる。従って、マケドニアとその周辺に居住していた先住民、所謂トラコ・マケドニア (Thrako-Macedonian: Θρακομακεδονία) の民の痕跡や、エーゲ海北岸に群生した南ギリシアの植民都市遺跡の調査を視野に入れて考察する必要がある。この視座から古代マケドニアの神話体系を整理した D. ミタ (Metta) によれば、その概要は次の通りである。つまり、ギリシアのオリュンポス神・英雄信仰を軸に、トラコ・マケドニアの

在来神、及び、中東などからの外来神が混淆・同化し、同時に政治的神話の創出も行われて、複雑な様相を呈している。マケドニアの信仰の特徴は、冥界性を帯びた神々や英雄が崇拝され、再生と魂の救済、死後の饗宴の生活が求められ、秘儀・秘教とも深い関連があったことである (Μήττα 2006: 135-139)。

文献史料からも窺えるように、マケドニア建国の父祖である英雄ヘラクレスの他ディオニュソス神、オルフェウス、ムーサ、ヘファイストスなどが崇められ、なかでもヘラクレスやディオニュソスは古銭や床モザイク、器物の装飾などによくその姿を残している¹⁰⁾。これらの考古遺物においては、「乙女 (ペルセフォネ、ヘレネなど) の略奪」やトロイ戦争の英雄をテーマにした叙述場面もよく見られ、何れも、死と再生、魂の救済、などとの関連を彷彿させる。ホメロスやヘシオドス、アポロドロスなどに著されたギリシアの神話・伝承に登場するムーサやオルフェウスは何れもマケドニアの地縁の神々でもあり、このほか各地の地名の由来となったトラコ・マケドニアの民の伝統の中で、オリュンポスやピエリア (Pieria: Πιερία) などの山、ストゥリュモン (Strymon: Στρυμόν) やハリアクモン (Haliakmon: Αλιάκμων) などの河の名の由来となった神々の信仰などが各地に存在した。マケドニアでは、自らの伝統に加えてこれら周辺の民の信仰世界をも引き継ぎ、またその眼前であるエーゲ海北岸で植民活動を行っていた南ギリシアの信仰世界から多大な影響を受けながら、神々の世界が形成されていった。このような形成過程で、古くは南ギリシア植民都市建設以前に現地で活動したフリュギア人やフェニキア人の信仰世界の痕跡 (cf. Tiverios 2008)、ヘレニズム期に至ってはエジプトやシリアなどからの外来の信仰の影響も加わり、複雑で混沌としつつも豊かな信仰の土壌が育まれたと考えられる。

3. 問題の所在

上述のように、ホメロスなどに著されたギリシアの神々と英雄の神話を軸にして地神や外来神が混淆・同化したものが古代マケドニアの信仰世界であり、20世紀後半以降、研究者はこの認識・理解のもとで現地調査を遂行してきた¹¹⁾。父祖ヘラクレスの肖像が刻まれた古銭、ディオニュソス神の床モザイク、シレノスやサテュロスの姿が彫り込まれた器物の装飾、トロイ戦争の英雄アイアコスらを描いた壁画、など多くの考古遺物が出土し、この信仰世界の姿を裏付け、更に補強してきた。一方で、1990年代以降2000年代にかけて明らかになったペラやディオン、またヴェルギナの女神神殿の姿とこれらから復元される女神信仰の様相は、従来の古代マケドニアの信仰世界の認識について変革を促すものであった。そこには、ゼウスやヘラ

クレスなどの建国の祖神への信仰に象徴される、族長が統率する騎馬遊牧民により構成される父権的社会が擁する神話世界のイメージとは異なった、生きとし生けるものを育む母権的な女神が力をもつ信仰世界の存在が認められた¹²⁾。この女神信仰にみられる冥界性¹³⁾は、従来から指摘されてきたマケドニアの信仰世界の特徴のひとつであるが、母性を基軸とした女性性を重んじていたという特徴は認識されてこなかったものである。このような状況にも拘らず、各々の発掘調査の報告、建築遺構や遺物の分析以外に、これらの女神信仰を俯瞰した総合的分析は未だ行われていない。各地の発掘調査は進行中ではあるが、上述の女神神殿の詳細も一定程度判明している現時点にて、古代マケドニアの信仰世界の新たな姿としての女神信仰の様相と特徴を見出す必要がある。

Ⅲ. 主題

上述を踏まえて、古代マケドニア都市遺跡に付随する神域・神殿及び信仰関連の痕跡についての近年の発掘調査成果から女神信仰の様相をとらえて特徴を見出し、古代マケドニアの信仰世界におけるその位置づけを探る。

1. 分析

マケドニア地域内における古代マケドニア関連の神域・

神殿の分布（前古典期～ヘレニズム期）をみたときに、現在までの調査結果からは、同一神を祀る神域・神殿がマケドニア各地に点在する分布図が描けることは稀で、女神デメテル及び母神の神殿が一定数確認されているのみである（表1）¹⁴⁾。したがって、このような神域・神殿の他、都市内の公共の場や住居、墓所から出土する小像や器物、古銭、壁画やモザイク床などの分析も有効になってくる。中でもテラコッタ製奉献小像は、庶民の素朴な信仰心を示す身近な品であり、神域・神殿以外の生活の場からまとまった数で出土することも多く、信仰生活の実態を探る鍵となる（Αδάμ-Βελώνη et al. 2017）。更に殆どの場合、婦人像が大きな割合を占め、なかでも女神を模したものが多くことから、女神信仰の大きな指標となる（図3）。また、神殿・神域の中や傍らに出土した小像製作工房の存在も神殿運営に密接に関わっていたと考えられ、信仰の様相を知る鍵となることはいうまでもない。

上述の、神域・神殿跡、神像、小像、小像工房跡を対象として、ここでは次の手順で分析を行なう。まずマケドニア全域における a. 女神信仰の痕跡、を分析し、如何なる女神がどこでどのように祀られていたかを広く把握する。その結果から、b. 女神信仰の変遷を分析する。ここでは、歴史時代のマケドニアにおいて最古かつ長期間に亘った女神信仰の場であるディオオンで観察される複数の女神信

表1 マケドニアにおける神域・神殿遺構出土地（前古典期～ヘレニズム期。南ギリシア植民都市は除く）

地 域		出土地	古都市名	神域・神殿名	主 神	時 期	主な出典	備 考
中央 マケドニア	ピエリア	ディオオン	ディオオン	-	デメテル	前古典期～ローマ期	ΠΣ 2015; 1999: 911, 914-919; ΠΑ1997: 17-22, 77-79.	協待の神としてヒュポリンピディア・アフロディテ(ヘレニズム期末)が確認。 ドリス式神殿
				-	アルテミス・エイレイテュイア	古典期末～ヘレニズム期	ΠΑ 1997: 22-29, 71-77; Τουράτοου 1997: 257-259.	
				-	ゼウス・オリュンπιオス	ヘレニズム期	ΠΑ 2009; 1997: 29-30.	
				-	ゼウス・ヒュプシストス	ヘレニズム期～ローマ期	ΠΑ 2009; 2005.	
				-	アスクレピオス	ヘレニズム期以降?	ΠΑ 2007; 1999: 84-85.	
				-	ディオニュソス?	-	Τουράτοου 1997: 257.	
				-	アテナ?	ヘレニズム中期以降	ΠΑ 1977: 333-335.	
				-	スフィキア及びリゾマタ近郊	-	-	
	イマシア	ヴェルギナ	アイガイ	-	エフクリア	古典期(前4世紀)～ローマ初期	Δ-ΣΠ 2000: 28-31; ΣΠ 2004: 479-490.	
				メトロオン	母神	古典期(前4世紀)～ヘレニズム期(前2世紀初)	Δρούγου 1999; Δ-ΣΠ 2000: 32-35.	
		ヴェリア	ヴェリア	-	ヘラクレス・キナギザ?	-	Brocas-Deflassieux 1999: 99;	
				-	アスクレピオス?	前3世紀以降?	Girtzy 2001: 66-72.	
				-	ディオニュソス?	-		
				コパノス・レフカディア	ミエザ	ニンフェオン	ニンフ	
		カリペトラ	-	-	母神	古典期末～ヘレニズム期	Στεφανή 2007: 563-568.	
		ヴォティエア	ペラ	ペラ	-	母神とアフロディテ	古典期末～ヘレニズム期	
	セスモフォリオン				デメテル(と娘神)	古典期末～ヘレニズム期	ΑΑ 1996a; ΠΣ 1999: 911-912, 914-916, 918-919.	
	-				ダロン	古典期～ヘレニズム期	ΑΑ 1997: 96-97.	
	パレオカストロ		キュロス	-	アテナ・キレスティザ?	古典期末?ヘレニズム期?	Girtzy 2001: 124-125; Χρυσοστόμου 1997: 494-496.	ドリス式神殿
	アルホンティコ・ペラ		-	英雄廟	英雄	前3世紀初頭	Girtzy 2001: 126a; Χρυσοστόμου 1997: 504-506; 1990: 215.	廟は未完成とみられる。
ヤニツア、アギオス・ニコラオス	-		-	アタルガティドス	ヘレニズム期～ローマ期	Χρυσοστόμου 1997: 500; 1992: 103-117.		
東マケドニア	ミグドニア	レテ	レテ	-	デメテル	古典期(前4世紀)～ヘレニズム期	Girty 2001: 204-205; ΤΤ 1992: 307-317; Τ-Φ 2009; ΠΣ 1999: 911-912, 914, 918-919.	

[凡例] - : 不明、出典の略語: 参考文献の項を参照

表2 マケドニアにおける女神信仰の痕跡（前古典期～ヘレニズム期）

地 域	都市(集落)	前古典期(前7世紀～前480)				古典期(前480～前323)				ヘレニズム期(前323～前168)				主な出典 (マケドニア都市・集落の神域・神殿に関する出典は表1を参照)			
		神 殿		小像 工房	小像大量出 土地 ()は地点	神 殿			小像 工房	小像大量 出土地 ()は地点	神 殿						
		デメテル	母神			デメテル	母神	その他女神			デメテル	母神	その他女神				
中央マケドニア	ディオン	○				○		アルテミス			○		アルテミス		AB et al. 2017: 94-97.		
	ヴェルギナ						○	エフクリア				○	エフクリア	○	AB et al. 2017: 111; Δ・ΣΠ 2000: 28-35.		
	ヴェリア													◎	○	AB et al. 2017: 110, 117-120; Δ・T 1998.	
	カリペトラ											○				AB et al. 2017: 128-131.	
	ペラ					○	○	アフロディテ	◎	○	○	○	アフロディテ	◎	○	AB et al. 2017: 79, 109-115.	
	アルホンティコ・ペラ				○(墓地)												AB et al. 2017: 59, 68-70.
	シンドス				○(墓地)												AB et al. 2017: 59, 71-73.
西マケドニア	ビュドナ								○								AB et al. 2017: 79, 91-93.
	エアネ	○			○										○		AB et al. 2017: 59, 64-67, 111.
東マケドニア	ペトレス														○		AB et al. 2017: 111, 124-127.
	レテ					○					○						AB et al. 2017: 98-100.
	テルメ				○(墓地)					○(墓地)							AB et al. 2017: 74-76.
	タソス	○		◎	○	○			○		○				○		AB et al. 2017: 61-63; ΠΣ 1999: 911-912, 914-916, 917-919.
	アンフィポリス					○				○	○						AB et al. 2017: 79, 101-104; ΠΣ 1999: 912-913, 918-919.
	アブデラ					○					○						AB et al. 2017: 105-107; ΠΣ 1999: 913, 917-919.
カルキディケ	アフテ								○								AB et al. 2017: 83-85.
	アカントス				○(墓地)				○	○(墓地)							AB et al. 2017: 59, 79, 86-90.
	オリュントス								◎	○							AB et al. 2017: 78, 80-82, 109.

[凡例] ○: 該当, ◎: (小像製作工房の)中心地的存在に該当, 斜字: 南ギリシア植民都市、出典の略語: 参照文献の項を参照

仰の盛衰から、女神信仰の変遷を捉える。

a. 女神信仰の痕跡

古代マケドニアにおける女神信仰の確実な物証である神殿や神像から、上述のデメテルと母神以外に、アフロディテ、アルテミス、エフクリアの信仰が確認されている¹⁵⁾。マケドニア都市、及び、周辺の南ギリシア植民都市におけるこれらの女神信仰の痕跡として神域・神殿、小像大量出土地、小像製作工房についてまとめたのが、表2である。

a-1) デメテルと母神

既述のように、マケドニアにおいて複数の神域・神殿で祀られていた神はデメテルと母神の両女神のみであり、両女神の神殿を同時期に擁していたのはヘレニズム期首都ペラのみである¹⁶⁾。これら神域・神殿址と小像製作工房址の各分布と時期変遷を整理した(図2-a, b, c)。これによれば、マケドニアの諸都市が、エーゲ海北岸に群生した南ギリシア植民都市のデメテル神殿及び小像製作拠点の影響下、徐々に同神殿及び同じく母なる神性をもつ母神の神殿を増やし、それと同時に信仰に関連深い小像の在地製作を開始した過程が読み取れる。この過程によれば、マケドニアにおいて、女神デメテルは前古典期から信仰され、母神信仰は古典期から首都級都市で出現する。これらの女神の信仰に欠かせない小像の製作は、当初は主に南ギリシア植民都市で行われていた。マケドニアにおいても新石器時代に遡る製作の伝統はあったが¹⁷⁾、長いあいだ手捏ねや

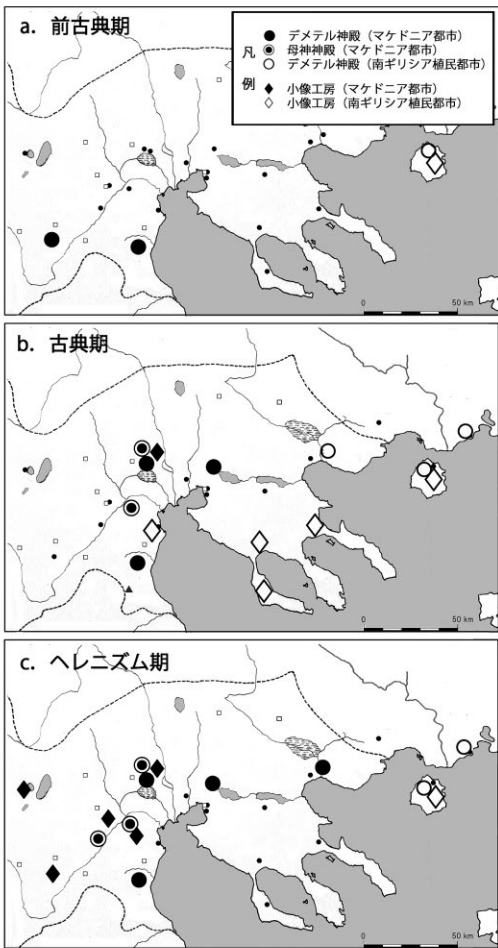


図2-a、b、c 古代マケドニアにおけるデメテル及び母神神域・神殿、及び、小像工房址の分布と時期変遷（前古典～ヘレニズム期）

ロクロの使用による製作が主であったとみられ、古典期に漸く南ギリシアから成型加工の技術が導入されて在地製作がはじまり (Αδάμ-Βελένη et al. 2017: 77-79)、在地の大量生産が本格化したヘレニズム期には、ペラとヴェリアという主要都市が2大拠点となるほどに盛んになった。その小像在地製作の代表格がペラであり、前古典期には見られなかった形でここにデメテルと母神の両女神が同時に祀られていた光景が見られ、これらから小像製作と女神信仰の進展がまさに連動していたことがわかる。

a-2) ペラにおけるデメテルと母神、そしてアフロディテ

前項でみたように、ヘレニズム期の新首都であるペラのみ、デメテル及び母神両女神の神殿を擁していた。都市境には「セスモフォリオン」が奉じられ、母神の神殿はアフロディテと合祀された形で都市中心部において大規模に営まれていた。デメテルと母神はいずれも母性をもつ成熟した女神として共通する神性を持っていたとされる。なぜひとつの都市の中で両女神が同時期に各自の神殿を持ち、並立して信仰されていたのか。ここで、両女神の信仰の各特徴及び両者の相違点が明らかにされる必要がある。特に後者はデメテルと際立って区別された神性があつたのか、また、如何なる理由にてアフロディテと合祀されたのか。これらを解明する手掛かりを得る為に、ここでは、両女神の神殿出土の小像と、神殿以外の場合からまとまった数で出土している小像、つまり、副葬品に多くの小像が確認されて

いるペラ東側墓地出土の一群との比較分析を行なう。

具体的な分析対象は、ペラ東側墓地の一角を占めて群をなす古典期末～ヘレニズム期 (前4世紀末～前2世紀半ば) の箱形墓 (K) 7基及び室形墓 (Th) 10基出土の小像である。これらの埋葬毎の出土状況を見て、小像の種類と数が時期毎にどのように変遷していくかを読み取り、ペラ女神神殿出土の小像と比較した。以下、①両女神神殿出土の小像

ペラのデメテル神殿 (前4世紀第4四半期～前2世紀半ば)、及び、「母神とアフロディテ」神殿 (前4世紀第4四半期～前1世紀初頭) において出土した小像は、参考の為にディオンのデメテル神域出土小像を含めつつ、表3-aのようにまとめられる。ヘレニズム期のほぼ同時期につくられた両神殿であり、小像の種類も似通っているが、若干の違いが見受けられ、各神殿主神の特徴をあらわしている。つまり、前者からは、「水甕を運ぶ婦人」像やアルカイック風の像が出土しており、ディオンの神域とも共通する古典的な様相を醸し出している。一方、後者はエロス像の出土が多く、また母神を象ったとみられる女神像を含む婦人の座像がやや多く、また特有の「ペア」像¹⁸⁾ が出ているなど、アフロディテ、母神の特徴がみられる (図3-a, b)。

②墓出土の小像

研究対象墓出土の小像については表3-bのようにまとめ

表3-a ペラ「母神とアフロディテ神殿」及び「デメテル神殿」、ディオンの「デメテル神域」出土小像の比較表

		婦 人														小計	エロス	ペア像	男性	ディオ ニュシス 神関連	動物	その他	像頭部	像部位	総 計	出 典 (略語は参考文献を参照)
都市	神域・神殿	キュ ベレ	アフロディテ 裸身 半裸身	アフロ ディテ と エロス	アテナ	アル デミス	ニケ	着衣	着座	胸像	神殿 仕え 人	水甕を 運ぶ 婦人	アルカ イック 風 婦人	婦人像頭 部	婦人像部 位											
ペラ	母神とアフロ ディテの神殿 デメテル神殿		2	13	5	7		28	8	10	3			50	33	159	18	4	12		17	16	8	28	262	AA 2000: 37-112.
			1		12	5	5	14	30	5		4	11	2	71	2	162	1		34	12	26	16		251	AA 1996a: 27-80.
ディ オン	デメテル神域	1				2		88	1	6		7	8	401	51	565			3		8	2	17	159	754	ΠΕ 2015: 67-89.

表3-b ペラ東側墓地出土小像に関する表

埋葬 番号	墓 名	出土場所	婦 人									小 計	埋葬毎の 出土婦人 像数平均値	エロス	ペア 像	ヘルメ ス	男性	戦士	役者	ベザゴ ゴス	ディオニ シス神関連	動物を 捉えた 姿	動物	像部位	総 計	埋葬毎の 出土小 像数平均値	時 期 (紀元前)	段 階	主な出典 k: 箱形墓(kivotoschemos taphos) lh: 室形墓(chalamos taphos)	埋葬 番号	
			アフロ ディテ	ニケ	着衣	裸身 /半裸身	着座	エロス を捉えた 姿	神殿仕 え人	婦人像 頭部	婦人像 部位																				
1	K-a1327t1			1							1	1.1									1				1	4世紀末	K-1	AA 1996b: 73-80 (kt1)	1		
2	K-a1327t2			1							1											1				1	4世紀末	K-1	AA 1996b: 80-82 (kt2)	2	
3	K-a1327t4												1								1				2	4世紀末	K-1	AA 1996b: 85-88 (kt4)	3		
4	K-a1327t15																					1				1	4世紀末	K-1	AA 1996b: 104 (kt15)	4	
5	K-a1327t29			1							1															1	4世紀末～3世紀初	K-1	AA 1996b: 105-107 (kt29)	5	
6	K-a1327t30					1							1													1	4世紀末～3世紀初	K-1	AA 1996b: 107-108 (kt30)	6	
7	K-a1327t31				3								3													3	4世紀末	K-1	AA 1996b: 108-109 (kt31)	7	
8	Th-a1327t20a		1		1							2	1	8			1							2	1	14	3世紀初	Th-1	AA 1996b: 114-118 (th20a)	8	
9	Th-a1327t25											1														1	4世紀末～3世紀初	Th-1	AA 1996b: 123-125 (th25)	9	
10	Th-a1327t26				1							1														1	3世紀初	Th-1	LA1996b: 125-27 (th26)	10	
11	Th-a1327t28a																									1	*	*	AA 1996b: 132 (th28a)	11	
12	Th-tA26										1	1														1	4世紀末あるいは3世紀初	Th-1	AA 1994: 27-30, 115, 121 (th26)	12	
13	Th-aZt34 (第1室)	床			3						2	5				1										6	3世紀第4四半期	Th-1		13	
14	Th-aZt34 (第2室)	骨箱 通路 表掘			4 (6)			(2)			(1)	(3)	(12) (10)	11	(5)							(2)	(1)		(2)	4 (22) (1)	16.5	3世紀第4四半期	Th-1	AA 1994: 39-43, 120, 195-196, 204-211 (th34)	14
15	Th-tC28	東側壁台										8	14													若干	18	2世紀半ば	Th-2	AA 1994: 30-33, 116-117, 135-137, 141-146, 150-152 (th28)	15
16		西側壁台			8									23	5											8					16
17		北側壁台 壁台間通路	1	22 (7)	(2)			(1)						(10) (11)																	28 (11)
18	Th-tTh32	北側壁台										13				1				1			4	1		8	2世紀直後	Th-2	AA 1994: 33, 36-37, 118-119, 168-169 (th32)	18	
19	東側壁台		11	1			1					13		3												16				19	
20	Th-tt33	東側壁台 通路		10	1			2				(2) (3)		3											16 (2)	16.5				2世紀半ば	Th-2

〔凡例〕 * : 不明 () : 埋葬地点以外から出土した小像数。どの埋葬に属するか不明。ただし、出土平均値の算出では、同じ墓に属するものとしてこの数も含めて墓内の小像数を統計し、埋葬数で割った。出典の略語: 参考文献の項を参照。



図 3-a ペラ、「母神とアフロディテ」神殿出土テラコッタ製母神小像
(Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 2000: Pl. 59
(cat. no. 52 1983.67.))



図 3-b ペラ、「母神とアフロディテ」神殿出土テラコッタ製アフロディテ小像
(Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 2000: Pl. 40a (cat. no. 5 1983.79.))

られる。箱形墓 (Kivotioschemos taphos: Κιβωτιόσχημος τάφος) は基本的に単葬であるが、室形墓 (Thalamotos taphos: Θαλαμωτός τάφος) は複数の室を擁し、また一室に複数の埋葬痕跡が見られるため、後者に関してはなるべく一埋葬毎の副葬品を区別し、各埋葬に伴うと認められる小像を数えた。墓の時期は大きく 2 段階に分かれるため、各々を第 1 期 (K-1、Th-1) は前 4 世紀～前 3 世紀初頭、第 2 期 (Th-2) は前 2 世紀として、時期変遷の指標としている。第 1 期の K-1 及び Th-1 はほぼ同時期とみてよいが、前者が箱形墓、後者が室形墓の時期を示し、墓のタイプから前者のほうが若干古いと見なされ得る。

これらの方法により、小像の種類とその時期的変遷を辿った。まず、婦人像の占める割合が高く、中でも一貫して着衣の婦人像が多い。K-1 → Th-1 → Th-2 と時期が下るにつれて、埋葬毎の小像数が増え、古い時期 (K-1) には見られなかった裸身あるいは半裸身の婦人像が出現している。アフロディテと明確に認識できる像は Th-1 期の 1 体だけであるが、エロス像の増加が目立つ。ただ、この経過において、第 1 期 (Th-1) の第 8 墓 (Th-a1327t20a) におけるエロス像数の多さは例外的ではあり、その理由として例えば被葬者が子供であったなどの可能性が考えられる。

上記①②より、ペラの両女神神殿の信仰の様相について、以下のことが読み取れる。

ヘレニズム期ペラの女神信仰は、「母神とアフロディテ」の神殿の位置と規模、また生活の場で小像が身近であった

こと等が示すように都市生活において重要であった。一方、小像は墓の副葬品としても多くみられ、死後の世界にも関わりが深いことが分かった。小像を副葬品として含む墓の割合は多くはないが、小像出土の墓は箱形墓及び室形墓で一定数みられる。被葬者の性別と年齢は殆どが定かでないが、共伴物として「垢かき器 (Stleggida: Στλεγγίδα)」が出土している例から、必ずしも女性や子供に限定されることはないと思われる。ただ、第 8 墓のように被葬者が子供と推測されるような場合もある。小像の内訳は、着衣の婦人像が多く、埋葬毎の小像は時期が下るにつれて多くなる。着衣の婦人像については、ペラの両神殿においても十分な出土数を占め、墓に何れの神殿の影響が及んでいるかは不明であるが、時期が下るにつれて、エロス像が増加、裸身及び半裸身の婦人像が出現することから、アフロディテ信仰と関連が深まっていると推測される。デメテル神殿からの影響が墓に及ぼされているか否かについては、それを示唆する際立った特色は特に見出せない。

小像の時期は、墓の時期から推測すれば、第 1 期 (前 4 世紀末～前 3 世紀初頭)、第 2 期 (前 3 世紀末～前 1 世紀初頭) に分けられ、前者はペラの両女神神殿の立ち上げ時期、後者の前半が「母神とアフロディテ」神殿の再編時期 (前 3 世紀末～前 2 世紀初頭) に重なる。時代が下るに従ったアフロディテ関連小像の増加、デメテル神殿が衰退していく前 2 世紀半ば以降も小像の数、婦人像 (なかでも着衣婦人像) の割合が保たれていること、などから、墓において「母神とアフロディテ」神殿の影響が強いことが見受けられる。従って、ペラの「母神とアフロディテ」の信仰、とりわけアフロディテ信仰は冥界的神性を帯びていたと考えられる。そして、デメテルのほうは、ペラにおいては豊穡を司る農業神としての神性に特化されて信仰されていたと考えるのが妥当であろう。

b. 女神信仰の変遷

前項では、ペラの母神の特徴を見出す鍵として、同母神とアフロディテ、あるいは合祀されたアフロディテ単体の冥界的神性が明らかに示された。ここで注目されるのは、ヘレニズム期新首都ペラにおけるアフロディテ信仰の唐突ともいえる登場である。そもそも古代マケドニアにおいてペラ以前はアフロディテ信仰の明確な伝統は見られず、ヘレニズム期ペラに突如として国家規模の祭祀に登場したかにみえるアフロディテであるが、この信仰の実態はどのようなものであったのか。マケドニアにおいてペラ以外は神殿が確認されていないアフロディテの信仰の痕跡について、筆者は別稿でアフロディテの神像と小像を取り上げてその信仰の出現経緯を探究した (松尾 2018)。この結果、同女神はマケドニア全域においてデメテルあるいは母神との

関わりがみられ、とりわけディオンのデメテル神域におけるアフロディテ関連の神像と小像の出土状況が特徴的であることから、次のような考察が導かれた。つまり、ディオンの由緒あるデメテル神域においてははじめはデメテルの他様々な女神の信仰が混在していたが、次第にデメテルを母とする娘とのペア神が形づくられて行き、この娘神の関連付けが、はじめはデスピナ (Depoina: Δέσποινα) やベルセフォネ、アルテミス、そしてヘレニズム期に至ってはアフロディテ、と時期により変遷したのではないか¹⁹⁾。

一方、ディオンの聖域内の、デメテル神域の東の湿地帯に出土した女神イシスの神域址 (ローマ期) はその前身がアルテミス・エイレイテュイア (Artemis Eileithyia: Ἀρτεμις Εἰλειθυία)²⁰⁾ であり、その定礎は古典期末であったことが判明している (Παντερμαλής 1997: 22-29)。後2世紀末に改築され、西側にあたる伽藍中央にイシスが祀られ、両脇に小祠があり、北にヒュポリュンピディア・アフロディテ (Ἵπολυμπία Ἀφροδίτη: Υπολυμπία Ἀφροδίτη)、南に同じくアフロディテ関連の像、そしてその手前の水槽を擁した小祠にはイシス・テュケー (Ἰσις Τύχη) の像が祀られていた²¹⁾。改築の際に、新旧の像を奉じたとみられ、前2世紀制作のヒュポリュンピディア・アフロディテ像は後2世紀に修復された痕跡が残る。従って、この神域では、古典期末～ヘレニズム期に主神として祀られていたアルテミス・エイレイテュイアの傍らに、ヘレニズム期末においてはヒュポリュンピディア・アフロディテも信仰されていた可能性がある。また、この神域では前4世紀末制作とみられるデメテルの座像も出土しており、デメテル神殿との関連も示唆している。

上述より、ディオンのデメテル神域では前古典期～古典期に母なる神としてのデメテルと共に娘神としてデスピナやベルセフォネ、アルテミスの信仰が混在していたが、古

典期末 (前4世紀末) に神殿が「対の特性」をもつ構造に改築され、デメテルと他3女神の組み合わせで母-娘ペア神信仰が確立、同時に近隣にアルテミス神域が建立されたとみられる。そして、ヘレニズム後期にはアフロディテ信仰がディオンの入って両神域で祀られるようになり、同女神も娘神として信仰されるようになったのではない。

2. まとめと考察

分析 a、b の結果から、古代マケドニアでは、主に母-娘ペア神を軸とした女神信仰が大きな力を持っていたと結論付けられる。母神系はデメテルと母神、キュベレであり、娘神系はデスピナやベルセフォネ、アルテミス、そしてアフロディテであり、関連の女神として、イシスやエフクリアも挙げられ、これらの女神は以下の変遷を経て、ヘレニズム期には最終的に、ペラにみられるような、デメテルと母神、アフロディテの三者に集約される形となる (図4)。つまり、マケドニア人が農耕を受け入れて定住生活に入った頃に南ギリシア植民都市からの影響のもと受容されたデメテルは前古典期にまずディオンの定着し信仰された。ディオンのデメテル神域では前古典期から古典期にかけて多くの小像が奉献され、その中にはキュベレやアルテミスの姿も見出されたが、多くの着衣婦人小像の中にはデスピナやベルセフォネも混在していたと考えられる。このディオンのデメテル神域では古典期末の神殿改築後の構造が示すように母-娘ペア神信仰が確立し、同時期、近隣にアルテミス・エイレイテュイアを奉じた神域が建てられた。一方、古典期に小アジアからマケドニアに母神の信仰が入り、首都アイガイ (ヴェルギナ) に母神神殿とエフクリア神殿が建てられるが、後者は祭神の神格から娘神的な位置づけであると推測され、首都において母-娘ペア信仰のひとつの形をつくり上げたと考えられる。このヴェルギ

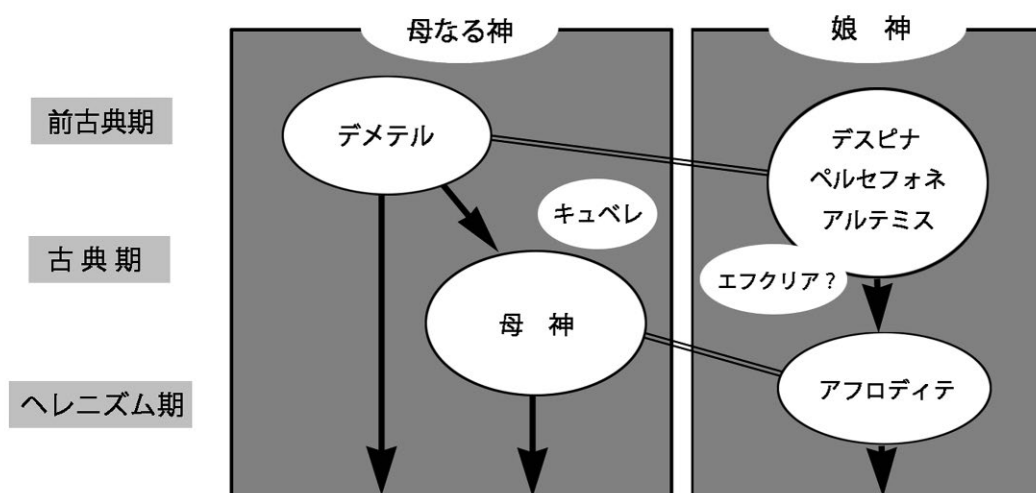


図4 古代マケドニアの女神信仰の変遷 (松尾 2018 図8 を一部改変)

ナの母神神殿で出土した小像が示すように²²⁾、アフロディテの信仰も徐々に受け入れられ、デメテルと同じ母なる神としての母神とその娘神としてのアフロディテのペアの概念が創出される。ディオーンでもヘレニズム期にアフロディテが受容され、デスピナらと徐々に交代する形で娘神の役割を担うようになった。ヘレニズム後期にはアフロディテの神像が奉じられた一方、同女神の小像については、当初はペルセフォネやアルテミスと区別し難い着衣の慎ましやかな姿で受容された可能性もある。アイガイより遷都された新首都ペラで母神との強固な結びつきのペア神として奉じられることになったアフロディテであるが、ヘレニズム期に小アジアとの交流の中から開放的な風潮があらわれ、小像においても徐々に裸身・半裸身の姿で表現されるようになったと考えられ、ペラの他、カリペトラ、ヴェリアなどヘレニズム期に栄えた都市においてその信仰に供するために小像工房が設けられ、その信仰は小像を通じて市井の人々に広がった。ここでアフロディテに期待された神性は、母神と共に都市や国境を守護する鎮護国家的な性格、そしてデメテルの娘神として引き継いだ冥界性であった。前者はその神殿の規模と位置、そして後者は墓地出土の小像がその証左である²³⁾。またペラにおいて、デメテルは母なる神としての主な神性は母神に譲り、農業神としての役割に特化された形で引き続き都市域境界付近に祀られた。

IV. おわりに―課題と展望―

古代マケドニアにおける母―娘ペア神信仰の確立と変遷を見出したが、南ギリシア及び外来の女神たちの元来の混沌とした神性に思いを巡らせば、様々な課題が浮かび上がる。以下、主な課題を3点を挙げれば、それらは、①母なる神に関する土着の伝統の存否、また土着と外来の関係、及び、②娘神の地母神的要素の整理と解明、③古典期に出現した母神の由来と系統の更なる検討、である。①については、マケドニア人の旧来の慣習の中に地母神的信仰要素があったか、存在したのであれば、それは古典期に出現した母神信仰とどのような関係があるのか、という課題である。マケドニアの地では新石器時代初期に既に小像製作が開始されていたとみられ、女性を象った小像が多く見つかっているが (Aδάμ-Βελένη et al. 2017: 19-21)、携わった人々の系統、地母神的信仰との関連、などは明らかになっていない。したがって、地母神的信仰の有力な証の一つとなる小像について、新石器時代から歴史時代 (前古典期～ローマ期) を辿る通時的分析により、在地製品と外来品の別、使用目的などを調査しながら、課題にアプローチしていく必要がある。また、②については、本稿の分析により母―娘ペア神の娘神とした女神の中で、少なくともアルテ

ミスやアフロディテには元来地母神的要素があったとされる²⁴⁾。これらの女神たちはマケドニアの人々にどのような受け入れられていたのか、更につきつめていく必要がある。一方、③は①②双方に関連する課題であるが、本稿の分析において出土した小像キュベレ等との関連からその由来を小アジアとみた母神についてサモトラケ島を経由した可能性が考えられることを述べておきたい。タソスにおけるデメテル信仰そしてエレフシス系の秘儀の存在のみならず、サモトラケ島における母神やカベイロイ (Kaveiroi: Κάβειροι) 信仰や秘儀・秘教の伝統はマケドニアの信仰世界との関連があるのではないか (cf. Tiverios 2008: 110-114)。本課題を明らかにする為には、東マケドニア、そしてトラキア沿岸に連なる南ギリシア植民都市に分析範囲を広げていく必要がある。まずは現地の考古学的調査の進展に期待しつつ、課題については稿を改めて論じたい。

凡例

- 1) 原語の転写と語句：名詞に関して以下の留意点を示す。なお、ギリシア語に関しては慣用化しているもののみを古典語読みで、研究上の用語や研究者名及び地名などは現代語読みとした。
【固有名詞】慣用語はカタカナのみで記した。それ以外に関し、研究上の用語、人名、地名についてはカタカナに転記しその後の () 内に原語から転記したラテン文字で記し、必要に応じて原語 (主に現代ギリシア語) を併記した。なお、これに加え、人名には必要に応じて存命あるいは在位期間を記した。
【一般名詞】適宜邦訳し、場合によってはカタカナに転記し () 内あるいは註釈に原語と若干の説明を加えた。
- 2) 文献：一部のギリシア語文献については、表内に記載した出典を示す目的で略語を付した。
- 3) 図版：参照図版に関しては本文中の () 内に図表番号を挿入した。

註

- 1) ヘロドトスやトゥキディデスにこれに関する言及 (Hdt. 8.137-139; Thuc. 2.99) がみられる (Hammond 1999: 43-46; Μήττα 2006: 83-97)。テメニダイはヘラクレスの玄孫テメノス (Temenos: Τήμενος) を祖とする「テメノス一族」の意。一方、アルゲアダイは王家一族に連なるひとりアルゲイオス (Argeios: Αργεῖος または Αργαῖος) の名に由来するが、この名は、語源に「白」や「輝かしい」の意味があるものの「アルゴス人 (出身者)」という意を含み、以降一族において好まれる名となった (Djurslev-Ogden 2018: 15)。この名がホメロスに初出し (Homer. Iliad, 2.155-175, 4.8; Odyssey, 8.578, 4.6)、アカイア人 (Achaeans) やダナオス人 (Danaans) と共にギリシア人の総称として使用されていたこと (Cartledge 2011: 23) は興味深い。
- 2) ヘロドトスに、アレクサンドロス I 世 (Alexander I Philhellene: Αλέξανδρος Α' Φιλέλλην: 在位前 495-454) がオリュンピア祭に参加した際に、自らの血統をギリシア系と主張するくだり (Hdt. 5.22.2) がある (Hammond 1999: 45; Μήττα 2006: 96)。ギリシア世界における自らの位置づけを定めるために建国伝説を求めた古代マケドニア王家の実態については、澤田 2006 に詳しい。な

お、古代マケドニア人の出自に関する議論に際して、これは近現代ギリシアのアイデンティティ追究の一環として現在もギリシア人の民族感情を揺さぶる問題であり、研究者間でもしばしば熱を帯びる、ということ念頭に置いておく必要がある。そもそも19世紀のギリシア国家独立、そして20世紀初頭のマケドニア地方の新生ギリシア国家編入という出来事は、各々、古代から連なるギリシア人としての誇り、そして、マケドニア地方の「ギリシア」への強い帰属意識、の二つを近現代ギリシア人の心底に深く刻み込んだ。これらに古典古代の歴史遺産の存在が深く関わっていることは言を俟たない。前者については、近世以降、「ヨーロッパの源」を求めて自らのアイデンティティ形成を志向してきた西欧列強との、ギリシア古典古代の歴史遺産とりわけ考古学的遺産の争奪戦を軸に形成されたといえる。一方、後者については、バルカン半島の地政学的事情から現代も醸成され続け、時に再燃する。中部（南）ギリシアと異なった道を辿り、近世以降の西欧人による飽くなき古典ギリシアの考古学的遺産の濫伐を免れた古代マケドニアの考古学的遺産が、現代ギリシア人に残された「最後の砦」ともいべきアイデンティティの証となり、現代において現地の考古学調査とはまさに自らのアイデンティティの表明と堅守に繋がっている。（本稿註6も参照。）このような事情は、1990年代に浮上し現在まで燦々続けてきたマケドニア旧ユーゴスラヴィア共和国（FYROM）との間の「マケドニア呼称問題」に集約されているといえる。「マケドニア」がギリシアに帰属すると信じるギリシア人の国民感情は、スラヴ系民が多数を占める国家の同名称使用を認めてこなかった。ただ事態は2018年夏以降に急転回しFYROMが「北マケドニア共和国」と改名して妥協と解決を図ろうとする動きが現われ、2019年に入り、漸くギリシア議会が重い腰を上げて国名変更の承認に至った。これはFYROMのNATO加盟に結びつき、またEU加盟への道を拓くことになり大きな前進であると見られる。ただしこれは国民感情より国家間関係を重視した両国首脳の見切り発車の合意であった印象も否めない。大多数の民意を反映した結果とはいえないため、今後両国およびこれを取り巻く国際社会の動向が注視される。ギリシア考古学におけるマケドニア考古学の特殊な立ち位置については、拙稿松尾2008を参照。マケドニア呼称問題については、各メディアで報じられてきたが、現時点での最新の動向については毎日新聞（平成31（2019）年2月3日付）を参照。

3) 後述。註10参照。

4) ペラヤヴェルギナ（Vergina: Βεργίνα）において古代マケドニア人が信仰したMother of the Gods（μητέρα των Θεών）は神々の母であるとして「母神」とした。このMother of the Godsに類する言葉として、Mother Goddess, Mother Earth, Earth Mother, Earth Fertility Goddess、などがあるが（Eliade 1987）、特に統一の定義はみられない。一方、これらの概念の邦訳語として「母神」のほかに「地母神」があり、後者について、『宗教学辞典』（小口・堀 1973）では、その英訳語をmother goddessとしながら「大地の生命力を人間に付与する機構または存在に対する信仰から生れた女神。この信仰は人類史上最古でもっとも普遍的な宗教活動の一つであり、後世の擬人化された女神の崇拜に接続する。」と定義している。M. エリアーデ（Eliade）によれば、太古、大地は「地母」や「母なる大地（テルス・マテル）」として直接の信仰対象であったが、後に農耕儀礼が発達して、植物と大収穫の大女神という神格がますます明確になるにつれて、本来の神格の存在は薄れ、新しい神格「穀母」にその機能を譲ったとしている。「地母神」から農耕「大母神」への移行であり、

古代ギリシアにおいてはガイアからデメテルへの移行であった（エリアーデ 1974: 134-174）。そして、自然界全体の母としてのガイアの多様な機能は、デメテルのほかヘラやアテナ、アフロディテやアルテミスらに分担されるようになる。Cf. 木村 1982: 19-23 したがって、本稿では、ガイアのようなより原初的な神格としての「地母」を「地母神」として、それ以後の新しい世代の、デメテルと同格的な「母なる女神」を、「母神」と呼ぶことにする。

- 5) 古代マケドニア人は、前4世紀のアレクサンドロス三世（Alexandros III: Αλέξανδρος Γ΄: 在位前 336-323）の東征に関わる伝記等以外、文字史料を殆ど残していない（澤田 2006: 23）。現存するギリシアの文献史料におけるマケドニアの初出はアミュンタス I 世（Amyntas I: Αμύντας Α΄: 在位前 ca.540-ca.495）の治世についてのヘロドトスの記述（Hdt. 5.94.1, 5.17-21）である。南ギリシアの文献史料については、Hammond 1999: 46-48 を参照。アレクサンドロスに関する大王伝及びその原典については、森谷 2007: 31-36 に整理されている。
- 6) 既述のように（註2）、古代マケドニアに関する考古学研究史は民族感情が絡む複雑な様相を呈しているが、文献史学も含めた歴史研究自体も当然のごとく考古学研究史と通底する前史がある。古代マケドニアについての西欧（欧米）における研究は長い間、フィリポス II 世（Philippos II: Φίλιππος Β΄: 在位前 360-336）とアレクサンドロス大王という傑出した二人の王についての伝記的関心が圧倒的部分を占め、その視座は彼らをギリシア世界の統一者、高度なギリシア文明をアジアに伝えた使徒として描くものであった（森谷 1993: 33）。この学問的関心の偏重には、史料の制約という事情以外に、現地が20世紀初頭までオスマン帝国の支配下にあった為、考古学的発掘調査が立ち遅れていたという事情があった。しかし既述のように、これは現地が近世以来活発化した西欧人による考古学的遺物の収奪を大部分免れ得たことを意味し（英仏人による散発的な踏査はあったものの）、20世紀後半、ギリシア人が自らの手で発掘調査に臨んだ時、大地はほぼ手つかずの状態の文化財を蔵していたという僥倖を導くことになった（松尾 2008: 175-179）。したがって、古代マケドニア研究については、現在も日々蓄積される考古学的発掘調査が文献史料の空白を補い、さらに新たな歴史像を構築する重要な手段となっている。1990年頃までの文献史学による古代マケドニア研究史については、森谷 1993: 33 に簡潔にまとめであり、E. N. ボルザ（Borza）が主要な参考文献のリストを提示している（Borza 1990: 283-286）。
- 7) 本稿では、ローマ侵略直前のアンティゴノス朝（Antigonids: Αντιγονίδεις）の領域を、王統アルゲアダイ以来最後までヨーロッパ本土に保持し続けた本拠地として扱う。このマケドニアの内地というべき地はほぼギリシア領マケドニアと重なり、中央マケドニア（あるいは下マケドニア: Lower Macedonia: Κάτω Μακεδονία）、西マケドニア（あるいは上マケドニア: Upper: Άνω）、東マケドニアの3地域に分割される。これらの3地域は、さらに古典文献に著されたマケドニア支配以前の古民族の名を冠した小区域に分割される。これらの小区域については、松尾 2013: 75 n. 9 を参照。なお、本稿図1・表1には、神域・神殿の出土した地点が判別し易いように、各々の地点を含む小区域名のみを記している。
- 8) Baege 1913。これについては、Witt 1970: 325; Πινυιάτογλου 1999: 911 を参照。
- 9) 各文献は、Δήμιτσης 1896; Gaebler 1935。これらについては、Witt 1970: 325 を参照。

- 10) 例えばイソクラテスは、アテナイとマケドニアの和平を説く際にギリシアの諸ポリスとマケドニアが神話を共有することを述べ (Isocr. Phil. 32-34, 142-148)、ブルタルコスはマケドニア人のオルフェウス信仰について言及している (Plu. Alex. 14)。Mήττα 2006: ix-x, 18 参照。また古代マケドニア人の信仰世界を鮮やかに映し出す考古学的物証のひとつとして、古銭がある。アレクサンドロスⅢ世をはじめとして、アルケラオス (Archelaos: Αρχέλαος: 在位前 413-399)、ペルディカスⅢ (Perdikas III: Περδίκας Γ': 在位前 365-359) らマケドニア王の古銭には、ヘラクレスの姿が刻まれている (Price 1974: 18-30)。また、ペラの床モザイクやデルヴェニ (Derveni; Δερβένι) のクラティラス (Kratēras) に描かれたディオニュソス神の姿なども有名である (Mήττα 2006: 39-46, pls. 8-9, また、前者については、Ακαμάτης 2004: 16-17, 25 pl.15 も参照)。また、マケドニアのゼウス信仰については、Düll 1977: 98 sq. を参照。
- 11) 古代ギリシアの宗教全般については、Bianchi 1975 を参照。また、宗教学の泰斗エリアーデはギリシアの宗教について次のように述べる。「(前古典期と古典期のギリシア宗教は) 類のない豊かな神話と儀礼を通じてうかがい知ることができる。神話が儀礼の基礎にあり、両者はともに地域的でもあり同時に全土的でもある。というのは地域の変種であっても、別の地域に似たような例がすぐにも見つかるからである。この点は神々についても当てはまる。地域と文化的コンテクストに応じて、その属性、伝承、名称までもが変化する… (エリアーデ・クリアーノ 1994: 60)」ギリシア (人) が否かという意味で曖昧な位置づけにあるマケドニアについても基本的には上記の特徴があてはまり、現地の研究者もこの認識の下に調査・研究を遂行してきたと思われる。また、エリアーデはギリシアの宗教について「ギリシアの宗教はきわめて複雑であり、いくつもの次元におよんでいる… (中略) …明らかになってきたギリシアの宗教には現代的な解釈と共鳴しあう要素もあれば、不可解で曖昧な困惑を招きつづける要素もある。(エリアーデ・クリアーノ 1994: 60-61)」として、ギリシアの、恐らく多神教的な世界観の在り様の前に半ば困惑する現代人の立場としての感覚にも触れる。そして、ギリシア哲学を取り上げ、「ギリシアの理性主義は、神々の、あるいは神性の探究を排除するのではなく、逆にわれわれと神との関係を承認し、その体系化を内包しているのである。定義から言って弁証法の過程の外部にある心理について言明しなければならぬ時に、プラトンは神話を利用する。… (エリアーデ・クリアーノ 1994: 62)」と述べる。ただし、これについて、一神教であるキリスト教的土壌で育まれた西欧の世界観を有する研究者の立場からよりも、多神教的土壌にて培われた感覚をもつ研究者の方が古代ギリシアの宗教観を理解し易いのではないかと考える。筆者はこの認識の下、日本古来の神仏習合、またこれを軸にした民間信仰の展開・浸透と比較しながら、古代マケドニアにおけるシンクレティズムを理解したいと考えている。
- 12) M. A. ギンブタス (Gimbutas) の説 (インド=ヨーロッパの半遊牧部族の家父長制的な文化の拡散により古ヨーロッパ全域に広がっていた母権の共通文化が破壊された。原初の母権的文化の特徴は、いくつかの属性を備えた女神への崇拝であった。) を参考にした。エリアーデ・クリアーノ 1994: 100 参照。
- 13) 後にⅢ 主題 1 分析 a-2 で検証。
- 14) 表 1 では、対象を古代マケドニアの中核地域である中央マケドニア、及び東マケドニアのミグドニア (Mygdonia; Μυγδόνια) で出土した遺跡に限定している。西マケドニアは近隣の山岳民の集落 (都市)、また東マケドニアはトラキア人をはじめとした近隣民の集落 (都市) そして南ギリシア植民都市と混在した状態であり、現在進行している発掘調査においても帰属が判然としない遺跡が多いためである。ハルキディキ半島も南ギリシア植民都市の遺跡が殆どであり、同様の理由でここでは除外する。
- 15) これらの女神の中で、エフクリアはアルテミス、あるいはヘラクレスの姉妹などと同一視されている女神であるが (Girtzy 2001: 57 n. 16)、銘によってのみ同定され、外見的特徴から存在を見出すのは困難である。一方、デメテルなど 4 女神については神像や小像から特徴を見出して同定することが可能である場合が多い。
- 16) ペラは前 5 世紀末にアルケラオス王 (Archelaos: Αρχέλαος: 在位前 413-399) によりアイガイから遷都され、都市計画に従った広大な都市が建設され、ヘレニズム期に繁栄した。Cf. Ακαμάτης 2004. 市中心部アゴラの北に隣接した「母神とアフロディテ」神殿は、前 4 世紀末に建造され、祭壇や集会場、食堂や地下水槽、倉庫、工房などを擁した大規模な複合施設であった。祭神の同定は、大量に出土した小像、銘付きの石板や彫像により行われた。なかでも、祭壇材の一部 (遺物番号 619.1983.1047)、及び、奉獻彫像の台座の一部 (同 597.1983.1036 及び 1983.1049) は、各々母神とアフロディテの銘が刻まれており、これらが同定の根拠となっている。(Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 2000: 188, 192, pls. 162 α, β, 166β, γ) 両女神の親縁性はギリシア・ローマ世界において多くの古文獻・銘により確認されている。「ウラニア (Ourania: 天上の)」という共通の添え名が冠せられることもあり、各地で合祀例がみられる。(Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 2000: 214-215) また、この添え名「ウラニア」については、松尾 2015: 454, 459 n. 5 を参照。一方、ペラ都市域の北東、市壁外に位置したとみられる「セスモフォリオン (Thesmophorion: Θεσμοφόριον: デメテル神殿)」は内径 10 メートルを測る露天のトロスで、「母神とアフロディテ」神殿と同時期に建てられたとみられる。同定は、ギリシア世界の他のセスモフォリオンとの比較によりおこなわれた (Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 1996a: 103-106)。つまり、都市域境界付近という立地、建造物の様相、出土物 (小像、器物等)、儀式の痕跡、などによる。小像については動物を象ったものが多く、なかでもデメテルの聖獣である豚が出土しており、儀式に使われた水を運ぶ器物も確認され、いずれもデメテル信仰の特徴をあらわしている (Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 1996a: 70-71, 91-93)。
- 17) 後述、「Ⅳ. おわりに―課題と展望―」の項を参照。
- 18) ここで出土した「ペア」像とは、母娘「ペア」1 体 (遺物番号 95)、エロス=プシュケー (Psyche: Ψυχή) 「ペア」3 体 (同 96, 97, 98)。前者は母神、後者はアフロディテとの関連を示す。(Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 2000: 55-57. Pls. 70-71)
- 19) ディオンのデメテル神域の同定は建築遺構や遺物 (彫像や小像、器物等) などから総合的におこなわれたが、銘のはいった古典期のアッティカ産スキュフォス (Skyphos) 底部 (遺物番号 ΜΔ1035) により確定的となった (Παντερμαλής 1997: 18; Πινγιάτογλου 2015: 93, 96(A12), pl. 183)。ただ、神域は一貫して対の特性がみられ、全く同じ 2 つの社殿、2 つの祭壇、2 つの井戸等がみつかり、デメテルが娘神と並行して祀られていたと解釈されており、娘神は様々な物証によりデスピナやベルセフォネ、アルテミス、そしてアフロディテと関連付けられている (Πινγιάτογλου 2015)。
- 20) アルテミス・エイレイテュイアは出産を司る女神であり、アレクサンドロスⅢ世の出生時にエフェソスからマケドニア宮廷に導入された信仰であったといわれている (Παντερμαλής 1997: 74-75)。

- 21) ヒュポリュンピディア・アフロディテとは「オリュンポス所縁のアフロディテ」の意。南側のアフロディテ関連の像とは、出土品からアフロディテとエロスの像であった可能性がある(パンτερμαλής 1997: 25)。
- 22) 残存状況はあまりよくないが、キュベレやデメテル、アフロディテなどの女神、また僅かだがディオニュソスやパンなどの男神の小像が確認されている(Δρούγου 1999: 118)。
- 23) ヘレニズム期首都ペラにおける「母神とアフロディテ」信仰の政治・経済上の重要性についてはΛιλιμπάκη-Ακαμάτη 2000: 215-219を参照。
- 24) アフロディテの出自はおもに東方起源と土着の印欧起源があるが、前者はイシュタルやアシュタルテなどの地母神にその系譜が辿れ、ギリシア神話では処女神であるアルテミスもミュケナイ時代を経由してミノア文明の伝統に遡れば、元は大地母神に繋がる(松尾 2002: 122)。

参考文献 (略語は表1～3で使用)

- Baegle, W. 1913 *De Makedonum Sacris*. Dissertationes philologicae Hallenses XXII.1. Halle, Hallis Saxonium.
- Bianchi, U. 1975 *La Religione greca*. Torino, UTET Libreria.
- Borza, E. N. 1990 *In the Shadow of Olympus: The Emergence of Macedonia*. Princeton, Princeton University Press.
- Brocas-Deflassieux, L. 1999 *Béroia, cité de Macédoine — Étude de topographie antique*. Béroia, Municipalité de Béroia, Fondation nationale de la recherche scientifique, Centre de recherche de l'Antiquité grecque et romaine.
- Cartledge, P. 2011 *Ancient Greece: a very short introduction*. Oxford, Oxford University Press.
- Djurslev, C. T. and D. Ogden 2018 Alexander, Agathoi Daimones, Argives and Armenian. *Karanos: Bulletin of Ancient Macedonian Studies* 1: 11-21.
- Düll, S. 1977 *Die Götterkulte Nordmakedoniens in römischer Zeit*. München, Wilhelm Fink Verlag.
- Eliade, M. (ed.) 1987 *The Encyclopedia of Religion*. New York, Macmillan.
- Gaebler, H. 1935 *Die antiken Münzen Nord Griechenlands, III: Makedonia und Paionia, I-II*. Berlin, G. Reimer.
- Girtzy, M. 2001 *Historical topography of ancient Macedonia*. Thessaloniki, University Studio Press.
- Hammond, N. G. L. 1999 *Το μακεδονικό κράτος: γένεση, θεσμοί και ιστορία*. Αθήνα, εκδόσεις Παπαζήση. (原版: Hammond, N. G. L. 1989 *The Macedonian States: Origins, Institutions and History*. New York, Oxford University Press.)
- Price, M. 1974 *Coins of the Macedonians*. London, British Museum Publications Ltd.
- Tiverios, M. 2008 Greek colonisation of the Northern Aegean. In G. R. Tsatsikis (ed.), *Greek colonisation: an account of Greek colonies and other settlements overseas, Vol. 2*, 1-154. Leiden-Boston, Brill.
- Witt, R. 1970 The Egyptian Cults in ancient Macedonia. Στο Β. Λαοῦδας και Χ. Μακαρόνας (Επιμ.), *Αρχαία Μακεδονία I: ανακοινώσεις κατά το πρώτον Διεθνές Συμπόσιον εν Θεσσαλονίκη, 26-29 Αυγούστου 1968*, 324-333. Θεσσαλονίκη, Ίδρυμα Μελετών Χερσονήσου του Αίμου.
- AB et al. 2017: Αδάμ-Βελένη, Π., Ηλ. Ζωγράφου, Α. Κουκουβού, Ου. Πάλλη και Ε. Στεφανή (Επιμ.) 2017 *Ειδώλιο: ένας μικρόκοσμος απο πηλό*. Θεσσαλονίκη, Αρχαιολογικό Μουσείο.
- Ακαμάτης, Ι. Μ. 2004 *Πέλλα και η περιοχή της*. Αθήνα. Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων.
- Βουτυράς, Εμμ. 1993 Η λατρεία του Ασκληπιού στην αρχαία Μακεδονία. Στο Δ. Παντερμαλής (Επιμ.), *Αρχαία Μακεδονία V-1: ανακοινώσεις κατά το Πέμπτο Διεθνές Συμπόσιο, Θεσσαλονίκη, 10-15 Οκτωβρίου 1989*, 251-265. Θεσσαλονίκη, Ίδρυμα Μελετών Χερσονήσου του Αίμου.
- Βουτυράς, Εμμ. 1999 Η λατρεία της Αφροδίτης στην περιοχή του Θερμαίου κόλπου. Στο Δ. Παντερμαλής (Επιμ.), *Αρχαία Μακεδονία VI-2: ανακοινώσεις κατά το Έκτο Διεθνές Συμπόσιον, Θεσσαλονίκη, 15-19 Οκτωβρίου 1996*, 1329-1343. Θεσσαλονίκη, Ίδρυμα Μελετών Χερσονήσου του Αίμου.
- Δήμιτσης, Μ. 1896 *Η Μακεδονία εν λίθοις φθεγγόμενοις και μνημείοις σωζόμενοις*. Αθήνα, Τυπογραφείο των Αδελφών Περρή.
- Δρούγου, Στ. 1999 Βεργίνα 1997. Το μητρώον. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 11 (1997): 115-120.
- Δ-ΣΠ 2000: Δρούγου, Στ. και Χ. Σαατσόγλου-Παλιαδέλη 2000 *Βεργίνα - περιδιαβάζοντας τον αρχαιολογικό χώρο*. Αθήνα, Ταμείο αρχαιολογικών πόρων και απαλλοτριώσεων, Διεύθυνση Δημοσιευμάτων.
- Δ-Τ 1998: Δρούγου, Στ. και Γ. Τουράτσόγλου 1998 *Ελληνιστικοί λαξευτοί τάφοι Βέροιας*. Αθήνα, Ταμείο αρχαιολογικών πόρων και απαλλοτριώσεων, Διεύθυνση Δημοσιευμάτων.
- Κοτταρίδη-Μπρεκουλάκη 1999: Κοτταρίδη, Α. και Χ. Μπρεκουλάκη 1999 Αρχαιολογικές έρευνες στα ημισιωτικά Πιερία. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 11 (1997): 109-114.
- ΛΑ 1994: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 1994 *Λαξευτοί θαλαμωτοί τάφοι της Πέλλας*. Αθήνα, Ταμείο αρχαιολογικών πόρων και απαλλοτριώσεων.
- ΛΑ 1996a: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 1996 *Το Θεσμοφόριο της Πέλλας*. Αθήνα, Υπουργείο πολιτισμού, Ταμείο αρχαιολογικών πόρων και απαλλοτριώσεων.
- ΛΑ 1996b: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 1996 Ανατολικό νεκροταφείο Πέλλας. Ανασκαφή 1989. *Αρχαιολογικό Δελτίον*, τόμος 44-46 (1989-1991): Μελέτες: 73-152, Πίν. 15-62.
- ΛΑ 1997: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 1997 Κτιριακά συγκροτήματα στην περιοχή καναλιού της Πέλλας. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 9 (1996): 93-104.
- ΛΑ 2000: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 2000 *Το ιερό της Μητέρας των Θεών και της Αφροδίτης στην Πέλλα*. Θεσσαλονίκη, Αθ. Αλτιντζής.
- Μήττα, Δ. 2006 *Μύθοι της αρχαίας Μακεδονίας*. Θεσσαλονίκη, University Studio Press.
- ΠΔ 1977: Παντερμαλής, Δ. 1977 Λατρίες και ιερά του Δίου. Στο Κ. Μητσάκης (Επιμ.), *Αρχαία Μακεδονία II: ανακοινώσεις κατά το δεύτερο Διεθνές Συμπόσιο Θεσσαλονίκης, 19-24 Αυγούστου 1973*, 331-342. Θεσσαλονίκη, Ίδρυμα Μελετών Χερσονήσου του Αίμου.
- ΠΔ 1997: Παντερμαλής, Δ. 1997 *Δίον: Αρχαιολογικός χώρος και μουσείο*. Αθήνα, Εκδόσεις Αδαμ.
- ΠΔ 1999: Παντερμαλής, Δ. 1999 *Δίον — η ανακάλυψη*. Αθήνα.
- ΠΔ 2005: Παντερμαλής, Δ. 2005 Ζευς Ύψιστος και άλλα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 17 (2003): 417-424.
- ΠΔ 2007: Παντερμαλής, Δ. 2007 Ανασκαφές, έργα αναδείξεως και disjecta membra. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 19 (2005): 373-380.
- ΠΔ 2009: Παντερμαλής, Δ. 2009 Δίον — Ιστορικά και λατρευτικά. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20 χρόνια, επετειακός τόμος: 261-271.
- ΠΣ 1999: Πινηγάτογλου, Σ. 1999 Η λατρεία της θεάς Δήμητρας στην Αρχαία Μακεδονία. Στο Δ. Παντερμαλής (Επιμ.), *Αρχαία Μακεδονία VI-2: ανακοινώσεις κατά το Έκτο Διεθνές Συμπόσιον, Θεσσαλονίκη, 15-19*

- Οκτωβρίου 1996, 911-919. Θεσσαλονίκη, Ίδρυμα Μελετών Χερσονήσου του Αίμου.
- ΠΣ 2015: Πινγιάτογλου, Σ. 2015 *Δίον: Το ιερό της Δήμητρας*. Θεσσαλονίκη, University Studio Press.
- Ρωμιοπούλου, Κ. 1997 *Λευκάδια-αρχαία Μίεζα*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων.
- ΣΠ 2004: Σαατσόγλου-Παλιαδέλη, Χρ. 2004 Βεργίνα 2000-2002. Ανασκαφή στο ιερό της Εύκλειας. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 16 (2002): 479-490.
- Στεφανή, Ε. Δ. 2007 Η περιοχή της Λευκοπέτρας Ημαθίας από την Εποχή του Σιδήρου ως τα χρόνια του Φιλίππου του Β'. Τα δεδομένα από τις σύγχρονες έρευνες. Στο Εμμ. Βουτυράς (Επιμ.), *Αρχαία Μακεδονία VII: η Μακεδονία από την εποχή του σιδήρου έως το θάνατο του Φίλιππου Β': ανακοινώσεις κατά το Έβδομο Διεθνές Συμπόσιο, Θεσσαλονίκη, 14-18 Οκτωβρίου 2002*, 563-584. Θεσσαλονίκη, Ίδρυμα Μελετών Χερσονήσου του Αίμου.
- Τουράτσογλου, Ι. 1997 *Μακεδονία. Ιστορία-Μνημεία- Μουσεία*. Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών.
- ΤΤ 1992: Τσακάλου-Τζαναβάρη, Κ. 1992 Ανασκαφική έρευνα στο νεκροταφείο της αρχαίας Λητής. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 3 (1989): 307-317.
- Τσιγαρίδα, Ε. 1999 Στοιχεία για τη λατρεία του Ηλίου στην <Ουρανιδών Πόλιν.> Στο Δ. Παντερμαλής (Επιμ.), *Αρχαία Μακεδονία VI-2: ανακοινώσεις κατά το Έκτο Διεθνές Συμπόσιον, Θεσσαλονίκη, 15-19 Οκτωβρίου 1996*, 1235-1246. Θεσσαλονίκη, Ίδρυμα Μελετών Χερσονήσου του Αίμου.
- Τ-Φ 2009: Τζαναβάρη, Κ. - Κ. Φίλης 2009 Η Λητή από την προϊστορία μέχρι την ύστερη αρχαιότητα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20 χρόνια: 369-384.
- Χρυσοστόμου, Π. 1990 Η τοπογραφία της Βέροιας Βοτταίας — Η Πέλλα, η αποικία της Πέλλας και οι χώρες τους. Στο Αρχαιολογικό Μουσείο Καβάλας και École Française d'Athènes (Επιμ.), *Μνήμη Δ. Λαζαρίδη — πόλις και χώρα στην αρχαία Μακεδονία και Θράκη: Πρακτικά αρχαιολογικού συνεδρίου Καβάλα 9-11 Μαΐου 1986*, 205-238. Θεσσαλονίκη, Υπουργείο Πολιτισμού, Αρχαιολογικό Μουσείο και École Française d'Athènes.
- Χρυσοστόμου, Π. 1992 Η λατρεία της Συρίας θεάς (Αταργάτιδος) στη Δυτική Μακεδονία. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 3 (1989): 911-919.
- Χρυσοστόμου, Π. 1994 Δυτικομακεδονικά ευχαριστήρια στο Δία Ύψιστο. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 5 (1991): 97-110.
- Χρυσοστόμου, Π. 1997 Η ιστορική τοπογραφία της βόρειας Βοτταίας. Στο Εταιρεία Μακεδονικών Σπουδών (Επιμ.), *Αφιέρωμα στον Ν.Γ.Λ. Hammond, παράρτημα Μακεδονικών Αρ.* 7, 491-508. Θεσσαλονίκη, Εταιρεία Μακεδονικών Σπουδών.
- Ερίαρ-Ντε, Μ. · Υ. Ρ. Κρία-Ν 1994 『Ερίαρ-Ντε世界宗教事典』せりか書房。
- Ερίαρ-Ντε, Μ. 1974 『豊稔と再生 宗教学概論2』Ερίαρ-Ντε著 作集第2巻 せりか書房。
- 小口偉一・堀 一郎 (監) 1973 『宗教学辞典』東京大学出版会。
- 木村重信 1982 『ヴィーナス以前』中央公論社。
- 澤田典子 2006 「古代マケドニア王国の建国伝説をめぐって」『古代文化』58巻3号 23-40頁。
- 庄子大亮 2002 「古代ギリシア周辺世界における英雄伝説の受容」『史林』85巻2号 1-32頁。
- 松尾登史子 2008 「マケドニア考古学の成立と展開」『西アジア考古学』9号 171-182頁。
- 松尾登史子 2013 「中央マケドニアの古代都市に関する考古学調査の現状」『西アジア考古学』14号 67-78頁。
- 松尾登史子 2015 「考古学からみた「ミロのヴィーナス」 — R. コウサーの近著論文から —」『古代文化』67巻3号 118-125頁。
- 松尾登史子 2018 「古代マケドニアにおけるアフロディテ信仰」『第25回ヘレニズム〜イスラーム考古学研究』15-22頁。
- 森谷公俊 1993 「古代マケドニア王国史研究の現状」『歴史学研究』650号 33-42頁。
- 森谷公俊 2007 『アレクサンドロスの征服と神話』講談社。

松尾 登史子

九州産業大学国際文化学部

Toshiko MATSUO

Faculty of International Studies of Culture,

Kyushu Sangyo University